

現職教員として教職大学院の学びに思うこと

北尾 雅章

(京都市立岩倉南小学校教諭)

教職大学院を志望するにあたって、正直、自ら進んでというものではなく、希望するなら考えてみないかという学校長の言葉から始まりました。身近な方で、現職教員として学ぶ姿を間近で見っていたので興味を持ちましたが、何か学びたい欲求に駆られて挑戦したのではなく、偶然機会が巡ってきたわけです。心から望んで学びたいが機会が得られない方には大変申し訳ないのですが、目的意識が欠けたまま大学院生活のスタートでした。しかし、今後の教員生活にとって有意義な出会いが待っていました。

まず、大学院で学ぶ人々との出会いです。現職教員の研修会の参加者は、京都市の小学校関係の方々がほとんどでした。でも大学院では、他校種（中学校・高等学校）の方、京都市以外の方、ストレートマスターの方と交流範囲が広がり、教育に対する考えが異なる方と同じ課題に取り組むことが求められます。一つ一つの発言に驚きを感じながら、時間の許す限り課題に向かって討論したことが大きな収穫でした。

次に、コースでの深まりのある学びとの出会いです。共通科目でストレートマスターの方と学ぶことに新鮮さを感じる一方、コース必修科目で課題をより深く追究する現職教員同士の科目は緊張感に包まれていました。また自習室において、科目を離れて学校現場での現状を話し合い、現在の学校の置かれている実態を、時間を忘れて交流することができました。当然のように学校現場では、日々研修会に参加する目的は、目の前の子どもたちのため、明日にでも役立つという内容のものが多いのですが、大学院では教育の本質を学ぶものと感じました。そこで、今までの学校での取組を振り返って、事例研究に臨むことができました。大学院で学んだことは、すぐに活かされることでなく、やがて気づくことがあると多くの先生方からご教授いただきました。

近況としては、平成 25 年度の近畿学校保健主事研究協議大会京都市大会の事務局を担当します。これからも多くの方との出会いや学びを大切にして、有意義な教員生活を送っていきたいと思います。ご指導いただきました竺沙先生をはじめ教職大学院の先生方に、改めてお礼を申し上げます。

(学校経営力高度化コース第 4 期生)